

びわこ文化公園植物だより〔β版〕

コガマ・ヒメガマ ガマ科

・学名 *Typha orientalis* (コガマ)
Typha domingensis (ヒメガマ)

・西エリアの水辺に自生、花期は7月



夏から秋にかけて、びわこ文化公園西駐車場の北側の水辺で、串に刺したフランクフルトソーセージのようなものが無数に立ちならんでいるのが見られます。水生植物のガマの仲間の穂です。

ソーセージのような見た目の赤茶色に膨らんだ部分は、雌花が密集した「雌花穂」(しかすい)です。その上方に続いている少し細い部分が、雄花が密集した「雄花穂」(ゆうかすい)です。雄花穂は若いときは大量の黄色い花粉を出していますが、花が終わると茶色のぼろのようになってしまいます。一方の雌花穂は次第に肥大し、秋の終わりに少し柔らかくなります。この時期に穂を強く握ると突然崩壊して、綿のようなものがモコモコとわき出てきます。この綿のようなものは無数の小さな果実の集まりで、そのひとつひとつに毛がついており、タンポポの果実のように風に飛ばされ、どこかに着地して新たな集団をつくります。

日本に分布するガマの仲間は、ガマ、コガマ、ヒメガマ、モウコガマの4種です。西日本にはモウコガマを除く3種が見られます。びわこ文化公園西エリアにはそのうちコガマとヒメガマの2種が混じって生えています。さて、2種を見分けられるでしょうか？



写真は、左がコガマ、右の中央がヒメガマです（右下にコガマの穂が一緒に写っています）。コガマの穂のほうがずんぐりして見えますが、2種の決定的な違いはほかにあります。コガマでは雌花穂の上に枯れてぼろぼろになった雄花穂がくっついていています。一方のヒメガマでは、雌花穂と雄花穂の間に緑色の茎があって、雌花穂と雄花穂が離れています。

2022 年現在、西駐車場付近の水辺にあるの

は大部分がコガマで、ヒメガマは少ししか生えて
いませんでした。両方見つけられるかどうか、探し
てみてはいかがでしょうか？

ガマの仲間の花粉は漢方では「蒲黄」(ほおう)
と呼ばれ、止血剤として利用されています。『古事
記』に登場する「因幡の白兔」の物語では、傷つい
たウサギが「蒲黄」を使って傷を治す様子が描か
れています。この物語は海辺が舞台なので、ここ
で「蒲黄」をとったのはガマの仲間のうち海辺の
湿地にもよく生えるヒメガマだったのではないか
とする説もあります。

(龍谷大学農学部・濱口優輔／三浦励一)

- ❁ コガマ・ヒメガマは [ここ](#) や [ここ](#) で見るこ
とができます。
(クリックで Google マップにリンク。10 メー
トル程度の誤差が出ることがあります)